

- (18) Data Decisions Group, Inc. (1988) *Sitka Tourism Market Study and Development Strategy*. Sitka Convention and Visitor Bureau and City and Borough of Sitka, Juneau. p.75.
- (19) Graburn, Nelson, H. H. (1989) *Tourism : The Sacred Journey*. *Hosts and Guests* (ed. V. Smith.), (pp.21-36.)
- (20) Data Decisions Group, Inc. (1988) pp.75-78.

## 現代の木地屋の集落が抱える諸問題に関する一考察 ―長野県木曽郡南木曽町漆畑の場合―

日 野 由 希

### はじめに

わが国の高度経済成長<sup>〔1〕</sup>は、都市に飛躍的な発達をもたらした反面で、村落には大きな打撃を与えた。都市での高度成長は多大な労働力の需要を生んだが、逆に村落、例えば農村ではその生業において機械化が進み必要な労働力が減少した。山村でもエネルギー革命により木炭や薪の需要が減少したことから同様であった。そして、高度経済成長により村落における労働力は都市へと移行し、全国的に都市への通勤圏外で教育や医療、道路の整備など生活環境の整備が遅れていた村落では、著しく人口が減少し大きな変貌を遂げた。

本稿では高度経済成長以降多様化した村落の中でも著しい変化の見られた山村に注目、その中でもとくに伝統的に山中で生業を営んできた木地屋に着目する。現在国内において木地業で生業をたてる唯一の集落は長野県木曽郡南木曽町漆畑であり、隣接する木曽郡山口村山口と下伊那郡清内路村堀田とともに「南木曽ろくろ細工<sup>〔2〕</sup>」という漆器の伝統的工芸品の産地として地場産業を担っている。

ここで木曽郡山口村山口で伝統的工芸品産地として指定を受けているのは漆器業を支える塗師屋である。また、下伊那郡清内路村堀

田は現在木地業を営んでいるが、昭和五十四年（一九七九）に他の職業からの転業であり、指定を受けたのは、明治二十五年（一八九二）から昭和二年（一九二七）の金融恐慌までの期間に行なっていたが、共に伝統的に木地業を営んできたのではない。そこで、本稿では漆畑でのフィールドワークを中心に現在の機能と形態について分析し、その社会構造について考察を進める。

漆畑は江戸幕府の崩壊後周辺の木地屋らが集まりムラヅクリを行なったもので、明治六年（一八七三）に当時蘭村の庄屋である尾崎縫之丞が蘭村の産業復興を計画し、木曾の御料林の払い下げに併せて木地屋を招請したことを契機に、現在の漆畑より北西の桂に集落を形成していた。<sup>3</sup>桂での木地屋は明治十一年（一八七八）に一五戸七四人まで増加、<sup>4</sup>木地屋の増加とともに桂での原木不足も生じ、明治十三年（一八八〇）に蘭川沿いの漆畑に新たにムラヅクリを行ない集落を形成した。その後昭和四十年代（一九六五）に漆畑の東の保神へ移住し現在に至る。これらの史実については明治九年（一八七六）に生まれ漆畑に暮らした木地屋大蔵政弥によって書かれた手記『木曾漆畑記録簿』<sup>5</sup>や木地屋の根源地であると伝えられる滋賀県神崎郡永源寺町蛭谷・君ヶ畑集落が本所となり、全国に散在している木地屋を統轄しようと巡国しながら連絡を取り合う制度である氏子狩を記録した氏子狩帳より、明治六年の『君ヶ畑氏子狩帳』<sup>6</sup>、明治十一年（一八七八）並びに明治十三年の『蛭谷氏子狩帳』<sup>7</sup>を合

わせ見ることから明らかである。

漆畑における研究は様々な研究者によって行なわれている。向山雅重は伊那の木地屋研究の一環として大蔵政弥の手記を初めて発表するとともに、<sup>8</sup>大蔵政弥へ集落の形成当時の聞き取り調査を行なっている。<sup>9</sup>この大蔵政弥の手記には杉本壽も着目し、その分析を行なっているが、<sup>10</sup>現在ではその原本の所在は不明である。また、中村たかを・桑野孚美は近世の移動漂泊生活はその社会背景から二手へと分かれたように見えたが、例外として木地屋の集落が存在するとし、漆畑における事例紹介が行なわれた。<sup>11</sup>楯英雄は飯田から木曾への木地屋の追跡調査の報告の一例として漆畑の木地屋に触れている。<sup>12</sup>木地屋が定着し集落を形成した年代が判明している事例を各地で調査を進めたのが田畑久夫による研究であるが、<sup>13</sup>漆畑の木地屋を氏子狩帳より検討し、ムラヅクリ定着後の展開を婚姻関係を踏まえて調査し、論じている。<sup>14</sup>

本稿では、現在の生活における諸問題の要因が現在に至る形成過程に在ったことを指摘したいが、あくまでも現代生活の中での諸問題について検討していきたい。

## 一、地域の概況

本来の漆畑は現在の集落より西側の木曾川支流蘭川沿いに位置する。木地屋は昭和二十二年（一九四七）に電気轆轤を導入するまで轆轤の動力を水車から取っていたためである。<sup>15</sup>その立地上自然災

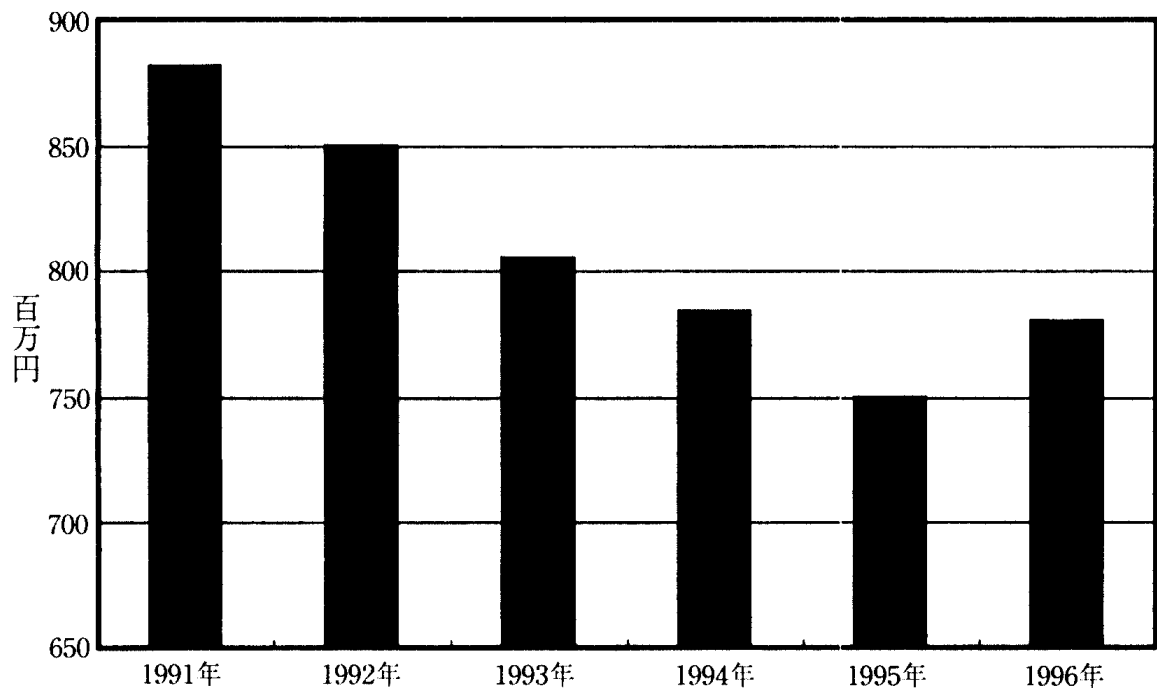


図1 「南木曽ろくろ細工」産地売上高

(南木曽ろくろ工芸協同組合算出資料より)

害に幾度も悩まされたが、昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風<sup>(16)</sup>を契機に行政からの指導により、漆畑の東側にあり、標高差は約四〇メートルある、崖上の字名保神へ順次移転した。保神は町内の別の集落に住む地主の所有する畑地の一部を行政が買い取ったもので、漆畑の人々が集団移転したため、通称として漆畑の名がそのまま残り現在に至っている。

現在の漆畑は行政区分では長野県木曽郡南木曽町に属す。南木曽町は人口六、二〇〇人<sup>(17)</sup>、面積の九四・五％が森林であり、そのうちの約八〇％が国有林で占められる山間の町である。町内は六つの地区に分かれ、漆畑は広瀬地区に属す。駅や町役場などの有る町の中心地である読書地区の平均的標高は約四〇〇メートルであるが、広瀬地区の中でも漆畑の標高は約九〇〇メートルであり町内でもその標高差は大きく、気温差も大きい。

南木曽町は旧中仙道が通り、その宿場町として残る妻籠宿が馬籠宿とともに信州で有数の観光地の一つであり、観光地として第三次産業が盛んである。それに加えて、木曽檜の名称に代表される木材・木工業・ろくろ産業も盛んであり<sup>(18)</sup>（図1参照）、ろくろ産業は漆畑が中心になり支えている。妻籠宿から国道二六五号線を清内路峠方面に進む沿線に立地する漆畑は、規模は様々であるが木地屋らがそれぞれ事業主となり個々の小売店において木地・漆器製品を販売している。集落内は木地屋の伝統的な姓である小倉・大蔵・堀川姓が多く、お互いを屋号で呼びあい、ほとんどの家が木地業に携わって

いる（図2参照）。

## 二、現在の漆畑の社会構造

ここでは現在の漆畑における社会生活が、都市の高度経済成長に伴い、どのような過程で成長してきたか、現代の中でとりわけ生産者である木地屋と中間流通業者、そして消費者の三者間の諸関係や漆畑集落を構成する木地屋の現代の社会生活の中での様々な意識等社会構造について検討する。

高度経済成長期にはプラスチック製品が急激に進出し、全国的に木地・漆器製品の出荷は大きく減少した。<sup>19</sup> 現在ではプラスチック製品の使用後の処理における環境汚染について論じられているが、当時は供給する側にとって大量生産できることは重要な利点であり、また、消費者にとっても安価で使いやすいと大きな需要があった。当時木地業を廃業し、山での生活を捨て好況に伴う都市へ流れる傾向がみられ、漆畑もその生業の存続の危機を迎えた。<sup>20</sup>

現在木地業で生計をたてる唯一の集落を形成しているのは国内では漆畑のみであるが、かつては木地屋といえば漆器の素材となる加工を施していない白木地を売ることであった。しかし、漆畑では厳密には木地業のみでなく塗師業にも関わっている。その契機となったのは漆畑ではムラヅクリ後、定着の過程において製糸業に関わっていたことにある。国内の製糸業の発展から、ギリ作りを行ない収入の多くを得ており、製糸業が不振になった大正中頃より漆器産業

として立ち上がろうと努力を重ねた。その結果、木目を生かす透明の摺漆を直接摺り込ませる方法が考案され、<sup>21</sup> これは現在の「南木曾ろくろ細工」に用いられている技法である。

漆畑に昭和初頭に生まれた木地屋は、その生業が木地屋と塗師屋は厳密に区別され、木地屋は塗師屋に全ての「塗り」の作業を依頼していた。しかし、昭和四三年（一九六八）に妻籠宿が文化保存されたことを契機に、開通していた国道に沿って観光客が増加することを見込んだ木地屋は、個々に事業主となり木地・漆器製品を販売する小売店を開店させたが、<sup>22</sup> 隣接しあう小売店の中で多様な商品を出す必然性が生じた。従来の塗師屋だけではなく、別の産地より塗師屋を雇ったり、後継者を国内でも有数の漆器産地へと塗師屋の修業に出すなどした結果、木地屋と塗師屋を明確に区別することは出来ない、兼業する現在の形態が見られるようになってきたのである。現在自営の小売店で販売される製品の中で白木地で売られているものは、丸まな板やこね鉢の一部等のわずかな商品であり、多くは木地に漆塗り加工もしくはウレタン加工を施し販売している。中間流通業者に卸す際も同様の形態が見られる。

木地屋にとって中間流通業者は、昭和初頭まで見られた木地屋と塗師屋を結ぶ伝統的な問屋の形態とは異なり、家具やクラフト製品を扱う業者が主であり、また近年では直接小売店に卸すこともある。<sup>23</sup> 漆畑では中間流通業者との取り引きの歴史は浅く、昭和五十年（一九七五）初頭からの取り引きである業者が多い。それは、高度経済

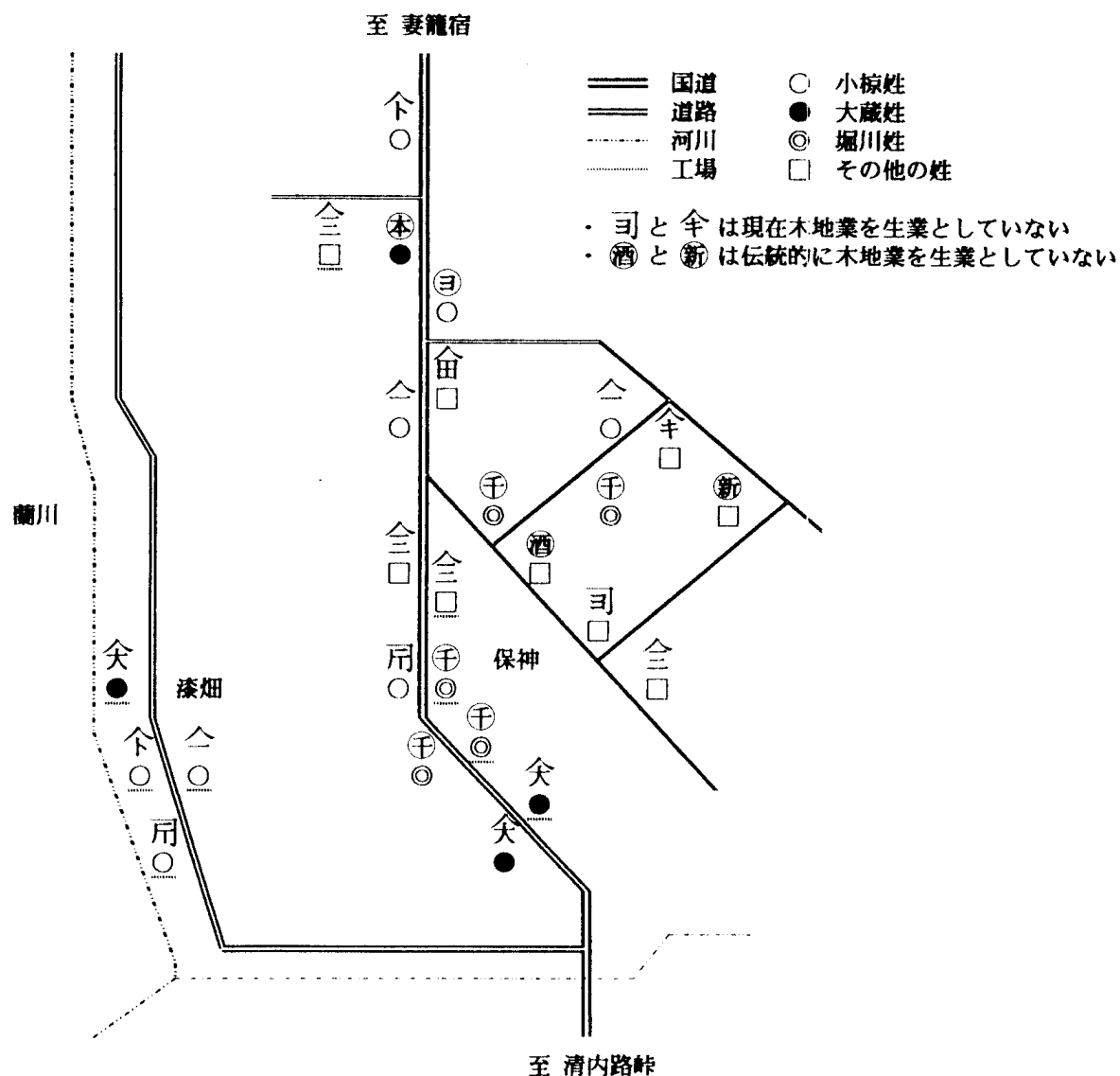


図2 現在の漆畑における家屋配置模式図  
 (南木曾町町役場資料をもとに聞き取り調査より作成)

成長期に手工業製品の産業自体が落ち込み廃業した業者もあるが、加えて木地屋が小売店を開店した際にその価格設定について業者と話し合いが上手くいかず、取り引きを中止した業者もあるためである。また、現在では不景気の中次第に業者との取り引き数も減少しているが、それぞれの小売店によって取り扱う業者が異なっており、これは個々に営業活動を行った結果である。

また、各小売店は工場内で製造した木地製品を、自営の小売店で売る製品と業者に納める割合も大きく異なる。<sup>(25)</sup>聞き取り調査からは小売店で販売する商品の割合が高い小売店は、店の活性度が高く、卸業者に納める製品の割合が少ない傾向が見られた。それは漆畑の立地に関係するが、漆畑を漆器の産地として目指して訪れる客も勿論いるが、国道沿線に立地するドライブインの役割を果たす場合が多い。そこで、通過する人をいかにして立ち止まらせるかということとは営業の大きなテーマであり、小売店に客を集められる店はそれに伴い活性度が高まるといえる。

そして、集客率は現在の店舗の立地条件や所有地の広さなどが大きく影響している。字名漆畑から字名保神への移転については先程述べたが、この移転の際保神での居住区の区割りには行政からの指導によって行なわれた。移転と同時に住民から生活環境の整備について強い要望があり、国はそれまでの林道を国道として整備することを確認し、区割り決定後に開通したのが国道二六五号線<sup>(26)</sup>である。区割りの後の開通は、道路に面し小売業に有利・不利という感覚を生

み出した。区割りの土地が道路に面していなかった木地屋の中には、地主と直接契約し土地を広く借り入れ小売店を開店させた事例もある。<sup>(27)</sup>

現在漆畑の中で観光会社と契約し、行楽シーズンの観光バスが立ち寄るように契約しているのは二軒である。国道は清内路方面に進むと昼神温泉郷<sup>(28)</sup>があり、また更にその先は飯田・名古屋方面に通じており、観光地を中継する休憩地として立ち寄るのである。バスの立ち寄る二軒では客を出迎え、もてなし、作業場の一部を案内し、添乗員に工場で作った木製品の小物を人数分手渡す。バス移動の途中で立ち寄る客によりどのくらいの売り上げがあるかは現実ではないが、集客率を一定に保つことは店の活性度を高く保つことが出来るのである。

集落全体の活性化のために漆畑内の全ての小売店がこのようになれば良いのであるが、所有地の広さにより限定されている。観光バスが停車できる広さが確保できているのが二軒だけなのである。集落全体を均等に活性化させるならば二軒が駐車場だけを提供することが望ましいが、現実に商売として考えると困難なことである。小売店を開店させてから約三十年の間に小売店の規模に格差の生まれてきたこの結果は、漆畑の集落の中で互いのライバル心を強め、集落としての調和を生み出すことが更に困難になっている大きな要因である。

### 三、現代生活における諸問題

生計に関わるこれらの要因は現代の漆畑の社会生活に大きく影響し様々な問題を生み出している。例えば飯田の漆器業が衰退していく過程で幾つかの木地屋の集落が廃絶したが、南木曾町内で消費者の流れに対応していこうと「木曾ろくろ工業協同組合」が形成された。この協同組合への加盟は自由であったが十社が加盟していた。ここで自治体では更に基盤の大きな地場産業に育成しようと通商産業省による伝統的工芸品の産地として指定を受けることを発案、既存の組合を解散した。

伝統的工芸品の指定を受けるには一定の条件を満たしていなければならぬ<sup>(30)</sup>が、その条件の一つに「一定の地域において少なくない数のものがその製造を行なう」とあり、ある程度の広域性が求められている。漆畑だけではないが木地屋は古くより漂泊生活をしてきたことが影響しているが、夫婦を一つの単位としており、独立した子供や親戚に対するつながりが希薄である。とくに明治十三年に意図的にムラヅクリされた集落である漆畑は、現在に至るまで生計をたてていくという面で、近隣の木地屋同士が身近な競争相手であった。また、木地屋は現在の滋賀県神崎郡永源寺町蛭谷・君ヶ畑の氏子であるため、集落内に祭られる神社はなく、昭和三十年代より開始した行政区である広瀬地区の行事である盆踊りなどには参加するが、集落内で共通の年中行事を持たなかったため交流を持つ機会を

逸していたのである。指定を受けるに際して漆畑では集落内でも互いが理解しあう事が困難であり、血縁関係がある木地屋同士でも一つになることには大変抵抗があったが、指定を受けることで知名度を上げ発展していこうと、行政区を超えて隣接する木曾郡山口村と下伊那郡清内路村の業者に呼びかけ、改めて十社で新たに発足させたのが現在の「南木曾ろくろ工業協同組合」であり、<sup>(31)</sup>「南木曾ろくろ細工」という漆器の産地として指定を受けるに至った。しかし、もともと漆畑という集落内でも調和が取れていなかったこともあり、「南木曾ろくろ細工」の伝統的工芸品産地として体系化されておらず、またその努力もされていないということは現在大きな問題である。

また、輸入の木地・漆器製品に対しても産地として対応がないまま現在に至っている。輸入の木地・漆器製品はかつて韓国や台湾で製造されているのが主流であったが、現在では中国、そのなかでも福建省の莆田市仙游県や福州市順昌県において生産されているものが主流である。<sup>(32)</sup>現地には大規模な工場が設立された当時の日本との取り引きでは、工場を建設した現地の人々を主体に雇用を行なっていたこともあって技術が伴わず、加えて国民性の相違より取り引きを行なうことも困難であると考えられた。しかし、その後日本でも数の漆器産地の木地屋がその指導にあたり、荒挽きや仕上げ挽きの技術が著しく向上した。そして、工場は日本や台湾の企業との合弁会社として大きな発展を遂げ、海外への上質で安価な木地・漆器製

品が大量輸出が可能になったのである。その価格は日本の港に着いた時点で木製漆塗りの椀がダースで八・二USドル<sup>33)</sup>、木製漆塗りの盆が一枚三・二USドル<sup>34)</sup>、それに対して漆畑の本地屋が挽いた製品は木製漆塗りの椀が一客で三、〇〇〇円前後、木製漆塗りの盆は七、〇〇〇円前後という大きな価格差があり、中国産の製品は国内の生産では絶対に不可能な価格帯で大量に輸出された。

国内の本地・漆器製品と競合することになった輸入の本地・漆器製品だが、現在漆畑の小売店にもそれらの商品の一部が陳列され販売されているのが実情である。それは商品の価格が大きく影響しており、観光地の中継地として漆畑を訪れる人の多くは、伝統的工芸品の産地として漆器製品を求めているのではなく、土産物を求めているためである。もともと漆畑の本地製品は水車を動力にしたため原木からヨコキドリをする机や広蓋等の大型の製品が生産されることが特徴であり、産地で生産する本地製品は小型でも土産物の価格としては適していない。そこで、輸入の本地・漆器製品は中間流通業者を通じて仕入れられ、売り上げを伸ばしている。

現在ではこれらの輸入の本地・漆器製品は日本の本地・漆器製品に匹敵する技術があるといえるが、平成七年（一九九四）にはその総輸出額は二八〇万USドル<sup>35)</sup>を超えており、その約九割が日本へ輸入された。安価に大量輸入された日本国内では飽和状態が生み出されたと予測され、購買力は弱まってきており、それに伴い輸入量も減少している。

## おわりに

以上のように長野県木曽郡南木曽町漆畑における社会構造の一面の分析を行なった結果、現在の漆畑は集落の形成後個々の本地屋が独自に発展を模索する過程で、集落内の各本地屋間に確執を生じ、それらが引き起こす多くの問題点を抱えていることが判明した。今後とも産地として体系化することは困難であると予測はされるが、将来への新たな活路を見いだすためにも、産地としての体系化によって輸入の本地・漆器製品への対応や産地としての広報活動を行ない、今後の地域経済の更なる発展へと繋げるべきであると考えられる。

また、今後新たな製品を開発する際には、更に現代人の衣食住における生活様式や生活習慣の変化に対応していく必要がある。材料の不足は材料を転換していくことで補い、仕上げの際には現代人の多様化している必要性に応じ、かつてよりデザイン面での研究が要求される。そして、伝統的に伝えられてきた技術を礎に、現代人の生活との調和を意識して検討していかねばならない。これらの問題点を解決するには個々の事業内ではその対応に限界がある。通産省より受ける伝統的工芸品の指定には何の保護もなく、実生活においては役には立たない。そこで、「南木曽ろくろ工芸協同組合」が産地の中核として起動できるように、産地として合議制によって物事の決議が進行されるように、改めて組織化されることが必要である。



今後は更に漆畑での人口構成や生産関係等に着目して調査を進め、山村の生業形態の中で木地屋の集落の位置づけを行なうとともに、他の漆器産地を支える木地屋にも着目しその社会構造との比較検討を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 昭和三十年(一九五五)から昭和四五年(一九七〇)にかけての日本の経済発展のこと。極めて経済成長率が高かった。
- (2) 昭和五五年(一九八九)通商産業省より伝統的工芸品の指定を受ける。
- (3) 南木曾町博物館所有資料に、明治六年八月十日付で桂に定住した木地屋大蔵芳兵衛の家族四人の寄留届があり、それによれば明治九年五月までその地に居たと考えられる。
- (4) 南木曾町博物館所有資料による。
- (5) 『木曾漆畑記録簿』は以下の論文に所収。  
向山雅重「木地師大蔵政弥老手記(一)」伊那三四七号、一九五七、一〇六頁。
- (6) 橋本鉄男『木地屋の移住史 第一冊 君ヶ畑氏子狩帳』民俗文化研究所、一九七〇、四四九、四五二頁。
- (7) 杉本壽「木地師支配制度の研究」福井県郷土誌研究、一九七二、八一四、八四〇頁。
- (8) 前掲(5)。
- (9) 向山雅重「木地師大蔵政弥老聞書(二)」伊那三四八号、一九五七、一〇五頁。同「木地師大蔵政弥老聞書(三)」伊那三四九号、一九五七、七、一二頁。  
前掲(5)とあわせて「木地師大蔵政弥老聞書―木曾漆畑抄記―」として考古学民俗叢書(六)『続信濃民俗記』慶友社、一九七二、九六、一二二頁に再録。
- (10) 杉本壽「木曾地方の木地師制度(一)」伊那五八四号、一九七七、四二、四七頁。同「木曾地方の木地師制度(二)」伊那五八五号、一九七七、八、一五頁。
- (11) 中村たかを・中村孚美「木地屋―その技術とくらし―」民族学研究三二四、一九六八、二九三、三〇一頁。
- (12) 楯英雄『木曾谷の木地屋』御宿寢覚宿、一九八〇。
- (13) 例えば次の論文があげられる。  
田畑久夫「揖斐川上流の木地屋集落の崩壊過程―小津の場合―」歴史地理学紀要一八、一九七六、二四九、二七一頁。  
同「ムラヅクリ後の木地屋集落の変貌―糸魚川大所木地屋の場合―」歴史地理学紀要二〇、一九七八、二四七、二六八頁。
- (14) 田畑久夫「信濃の木地屋」藤岡謙二郎監修『東山道の景観と変貌』(七道の景観と変貌Ⅳ)古今書院、一九九一、一〇八、一一八頁所収。
- (15) 川沿いに階段式に三軒ずつ水車が並び、隣接して住居があ

った。漆畑は何度か火災にあっており、現在の漆畑は昭和六三年（一九八八）の火災の際に焼失を免れた建物を工場として使用している。

- (16) 毎年梅雨期や台風など豪雨になる度に川が氾濫するため避難していた。

- (17) 平成七年（一九九五）国勢調査による。

- (18) 轆轤とろくろの違いについてだが、本稿においては通常は轆轤とするが、南木曽町役場資料ではろくろとしていたため、便宜的に使い分けることにする。

- (19) 漆畑もその例外ではなく、木地・漆器製品の出荷は減少した。木地屋はその生業で生計をたてていくことは困難であり、一時的に建築業等他業種の職業に就いた。

- (20) 漆畑では高度経済成長期に世帯数が大幅に減少した。

- (21) 『木曽漆畑記録簿』によれば、大正十年（一九二一）頃、当時漆畑の有力者であった大蔵鶴弥・信弥兄弟によって招請され、木曽福島から弟子とともに漆畑に來た塗師屋徳原政吉によって考案されたところ。

- (22) 漆畑内では行政からの指導後、早々に保神へ移転し小売店を開店させた場合と、指導を受けた後も漆畑に居住し小売店を開店させ、その後保神へ移転してきた場合等個々によって異なる。

- (23) 中間流通業者を経て製品を流通させるために卸に出すと、

業者に他の産地の製品もノルマで引き取り漆畑の小売店で売るように要求される場合が多い。例えば、漆畑内のB、C、D店でこれらのことが伺える。

- (24) 木製小物製品を取り扱う業者に一部重なる場合がある。

- (25) 例えばA店は卸業は行っていない。B店では工場で生産する全体のおよそ四割程度、C店・D店はおよそ五割程度、E店はおよそ六割程度を中間流通業者に卸している。

- (26) 産地づくりの一環として昭和四八年（一九七三）頃より漆畑を「木地師の里」と称し広報活動を行なってきたが、平成十一年（一九九九）より産地を抜ける国道二六五号線には「工芸街道」と愛称をつけ、広報活動を行なうことが認可された。

- (27) 当初は借地であったが、その後地主より土地を買い取っている。

- (28) 昼神温泉郷は昭和四八年（一九七三）に国鉄中津川線の建設予定地を工事中に湧水したもので、その後工事は中断され温泉郷の開発が進められた。保養地的な性格を持つ昼神温泉郷は下伊那地方最大の温泉地として発展を遂げている。

- (29) いくつかの事例があるが漆畑の周辺では例えば大平村があげられる。大平村については以下を参照。

飯田市教育委員会『太平の民俗』社団法人信濃路、一九七二。

杉本壽「大平村落の成立並に廃絶（一）」伊那五八七号、一九七七、八―一六頁。同「大平村落の成立並に廃絶（二）」伊那五八八号、一九七七、一一―二〇頁。同「大平村落の成立並に廃絶（三）」伊那五八九号、一九七七、九―二二頁。

(30) 通商産業省による伝統的工芸品の指定は「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」により、対象によって指定の認可を受けるための条件が定められている。

(31) 現在南木曽ろくろ工芸協同組合に所属しているのは以下の一〇店である。

大蔵ロクロ工芸・小椋商店・小椋製盆所・小椋ロクロ工芸所・神原漆器工芸所・漆美堂漆器店・清内路木工所・田上民芸・野原工芸・堀川ろくろ工芸（五十音順）。

(32) 日本貿易振興会の調査資料参照。

(33) 東京市場では平成六年（一九九四）六月二七日に一USDルが九九円台になり、その後円高傾向は続いた。調査時の平均円相場よりここでは一USDルを九八円とし、計算すると木製漆塗りの椀は一ダース八〇四円である。

(34) (33)と同様に計算すると、木製漆塗りの椀は一枚三一四円。

(35) (33)と同様に計算すると、中国から輸出された木地・漆器製品の総輸出額は二億七四四〇万円に及ぶ。

【付記】 本稿は平成九年度に昭和女子大学大学院生活機構研究科

に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。なお、本稿の骨子は平成十一年十二月十一日第四回文化史学会において研究発表したものである。本稿作成にあたり、昭和女子大学院生活機構研究科 後藤淑先生、井内昇先生、田畑久夫先生に深謝し厚くお礼申し上げます。